

学 位 論 文 要 旨

氏 名 田中 響

題 目 乳児との対面時の母親の視線及び応答性に関する縦断研究

序 章

母親と乳児の応答的關係は、社会性の発達の出発点であり、子どもの社会性を方向づけるものとして重要である。母親は乳児を見て表情・行動の変化や状況を読み取り、敏感に適切に応答する。そして、母親の働きかけに対して乳児が反応する。このようにして相互のコミュニケーションが行われていく。その時にお互いに見つめ合うアイコンタクトは特徴的である。大人は大人同士でお互いに長い間、目を見つめ合うことはないが、母親と乳児の場合、お互いに見つめ合って長時間そのままにいることもある(Stern, 1979)。

そこで、本研究では、母親の乳児への視線に注目して、母親の乳児への視線が出生直後から約1年間にどのように変化していくのか、視線計測機を用いて、実証的、縦断的に検討した。

第1章 乳児との対面時の母親の視線及び応答性—生後2日から4ヶ月までの変化—

乳児の反応は生後4ヶ月間で大きく異なり、新生児に見られる内因性の生理的微笑から人に向けられる社会的微笑に変わる。そこで第1章では、社会的微笑の出現を含む出生直後から4ヶ月間における母親の乳児への視線と応答的行動の変化について、視線計測機を使用して、分析した。方法は、母親に視線計測機(帽子型)を装着させ、対面で自由に乳児をあやすように指示した。計測は、生後2～3日、1ヶ月、4ヶ月に実施した。母親が乳児の「顔」、「身体」、「その他」のいずれに視線を向けるのか視線分析を行った。さらに、乳児の微笑時を抽出し、乳児の微笑時の母親の対応について検討を行った。その結果、乳児との対面時、母親が注視する対象はほとんどが顔であった。乳児の微笑への母親の応答的行動は、社会的微笑時に急激に増加していた。また、乳児に社会的微笑が出現することによって、母親はそれまで以上に乳児の顔を注視し、あやし言葉や接触行動をより多く出現させていた。このような母親の応答的行動の増加は、乳児とのアイコンタクトを増加させ、社会的微笑をさらに促進させることが示唆された。

(小児保健研究 71(3), 414-419, 2012)

第2章 乳児との対面時の母親の視線及び応答性 —生後4ヶ月から10ヶ月までの変化—

乳児期初期、特に社会的微笑の発現によって、母親は乳児の顔をより多く注視し、乳児に対する応答的行動を増加させていた。このような乳児と母親の二項関係は、やがて乳児が周囲の物に興味を示すことによって、乳児と母親と対象の三項関係のかかわりへと変化する。そこで第2章

では、二項関係から三項関係へと発達していく頃に、乳児との対面時の母親の視線及びあやし言葉、あやし行動がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした。測定は、生後4ヶ月、6ヶ月、8ヶ月、10ヶ月の4回、縦断的に実施した。母親の視線停留点を乳児の「顔」、「身体」、「その他」に判別し、「アイコンタクト」、「共同注意」について視線分析を行った。さらに、あやし言葉とあやし行動を判別した。その結果、どの時期においても母親が乳児を注視している時間のうちのほとんどが、乳児の顔に向けられたものであることが明らかになった。直視する視線は相手の視線を引き付けるということが知られている (e. g. Senju, 2005)。本研究においても、母親に直視された乳児は母親の視線を受けとめて見つめ返し、母親とのアイコンタクトを生起させていることがわかった。しかし、月齢が6ヶ月、8ヶ月、10ヶ月と進むにつれて母親が乳児以外の対象を注視する割合が増えていった。これは、乳児が周囲の物を注視するようになり、母親が乳児の視線を追うという共同注意が成立したためである。この共同注意によって、母親は乳児の顔への注視が減り、乳児が注視する物への視線が増加していったといえる。しかし一方で、あやし言葉やあやし行動が増え、母親からの積極的な言葉や行動の働きかけが多くなっていくことがわかった。乳児の視線が母親から他の対象へ移ることによって母親の言葉かけが増加し、母子間のコミュニケーションが増したといえる。

(小児保健研究 72(4), 493-499, 2013)

第三章 学校教育における保育学習への活用

本研究成果を学校教育に活用するための検討を行った。学校教育においては、高等学校家庭科の保育学習として、乳児の発達や母子のかかわりについての内容が含まれている。「実際に乳児にかかわる機会をもち、保育への関心をもたせることや、どのようにかかわったらよいかなど保育の在り方について考えさせること」等が学習のねらいとなっている。本研究成果はそのような学習を進める上で乳児に対するかかわり方を指導する具体的な方法や教材等の開発に寄与できるものとする。そこで、本研究成果を基に、保育学習への教材化の可能性を提案した。

終章

出生直後から生後10ヶ月までの乳児に対する母親の視線に関する縦断的な研究の結果、乳児の社会的微笑の出現により母親の乳児の顔への視線が増し、共同注意の出現によって母親のあやし行動・言葉が増加することがわかった。これらのことから、乳児と母親との対面場面が相互のコミュニケーションの強化につながっていることが実証的に示された。